

伏見城跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび土地区画整理事業に伴います伏見城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

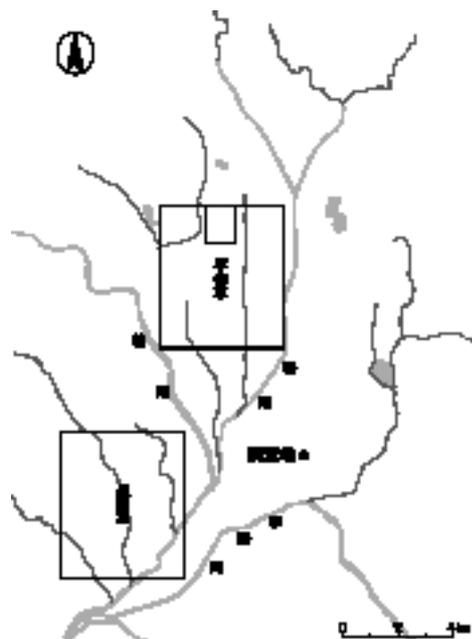
平成14年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡
- 2 調査地点所在地 京都市伏見区深草大亀谷六駄町・万帖敷町
- 3 委託者及び承諾者 深草南部地区土地区画整理組合 理事長 加藤正雄
- 4 調査期間 試掘調査：2001年9月28日～2001年11月26日
発掘調査：2002年5月8日～2002年7月30日
- 5 調査面積 試掘調査：970㎡（計10トレンチ）
発掘調査：1,500㎡
- 6 調査担当職員 南 孝雄・出口 勲
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「竹田」「大亀谷」「丹波橋」「桃山」および深草南部地区土地区画整理組合作成の対象地現況図を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 試掘調査・発掘調査ごとに通し番号を付し、遺構種類の記号を前につけた。SB：建物、SD：溝、SE：井戸、SX：不明、その他
- 13 遺物番号 挿図・図版の土器類・土製品・瓦類の順に通し番号付けた。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 作成担当職員 南 孝雄



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3 . 試掘調査	5
(1) 各調査区の概要	5
(2) 遺物の概要	9
4 . 発掘調査	10
(1) 層 序	10
(2) 遺構の概要	10
1) 第 1 面の遺構	11
2) 第 2 面の遺構	15
(3) 遺物の概要	17
1) 第 2 面出土遺物	18
2) 第 1 面出土遺物	23
3) その他の出土遺物	24
5 . ま と め	25

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 試掘調査状況 (東から)
		2 試掘 7 トレンチ全景 (北から)
		3 試掘 10 トレンチ全景 (北から)
図版 2	遺構	1 第 1 面全景 (北東から)
		2 路面 (北東から)
		3 宅地境界溝 (北西から)
図版 3	遺構	1 SK118 (東から)
		2 SK31 (北から)
		3 SK297 (北から)
		4 SK111 (東から)

- 図版 4 遺構 1 第 2 面全景 (北西から)
 2 SB 2 (南西から)
 3 SX483 (西から)
- 図版 5 遺構 1 SE466 (北西から)
 2 SX472 (西から)
 3 SX482 (北東から)
 4 北壁土層堆積状況 (東から)
- 図版 6 遺物 1 第 2 面整地層出土遺物
 2 第 2 面SK249出土遺物
- 図版 7 遺物 1 第 1 面SK 4 出土土師器皿
 2 第 1 面SK 4 出土軟質施釉陶器
- 図版 8 遺物 試掘調査出土墨書土器、第 1・2 面出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査前全景 (南東から)	1
図 2	撮影風景	1
図 3	調査位置図 (1 : 10,000)	2
図 4	調査区配置図 (1 : 2,000)	4
図 5	3・5・7・9 トレンチ遺構実測図 (1 : 200)	6
図 6	10 トレンチ A ~ C 区遺構実測図 (1 : 200)	8
図 7	墨書土器実測図 (1 : 4)	9
図 8	調査区北壁断面図 (1 : 40)	10
図 9	第 1 面遺構実測図 (1 : 300)	11
図 10	SD88 断面図 (1 : 40)	12
図 11	SK 4・22・31・38・118、SE111・297 実測図 (1 : 40)	13
図 12	第 2 面遺構実測図 (1 : 300)	14
図 13	SB 2・SX483 実測図 (1 : 100、1 : 20)	15
図 14	SE466 実測図 (1 : 40)	16
図 15	SX465 実測図 (1 : 20)	16
図 16	SX381・472・482 実測図 (1 : 40)	17
図 17	第 2 面出土遺物実測図 1 (1 : 4、25のみ 1 : 3)	19
図 18	第 2 面出土遺物実測図 2 (1 : 4)	20

図19	第1面出土遺物実測図(1:4)	22
図20	SK21・477出土遺物実測図(1:4)	23
図21	SX472出土瓦器甕実測図(1:8)	24
図22	第2面整地層出土軒平瓦拓影・実測図(1:4)	24

表 目 次

表1	試掘調査遺構概要表	5
表2	試掘調査遺物概要表	9
表3	発掘調査遺構概要表	11
表4	発掘調査遺物概要表	18

伏見城跡

1. 調査経過

今回の調査は、深草南部地区の区画整理事業に伴って実施したものである。この報告は、平成13年に実施した試掘調査と平成14年に行った発掘調査の概要報告である。調査地周辺は、既にほとんどが住宅地となっているが、区画整理対象地は、平成14年の発掘調査前まで、ほぼその全域が畑として活用されており、対象面積は約40,000㎡に及ぶ。

試掘調査 平成13年にこの全域を対象に、遺構の有無およびその範囲を確認するための試掘調査を実施した。試掘調査における調査トレンチは、対象地内を南東方向から北西方向に通る幅約2mの小道（通称、一間道）に面して6箇所、これ以外に地形的に安定しているところ、またはその変化点などに4箇所の合計10箇所に設定した。この試掘調査によって、「一間道」に面して建つ礎石建物を検出し、さらに墨染通から南へ約30mの崖面が人工的な造作を受けていること、出土遺物からは付近に江戸時代の寺院が存在することなどを明らかにすることができた。

発掘調査 試掘調査の成果を受けて京都市埋蔵文化財調査センターは、発掘調査が必要と判断し、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することになった。区画整理組合と協議の結果、発掘調査は平成14年5月8日から区画整理工事と併行して行うこととなった。

調査では、江戸時代後期と江戸時代前期の2面の調査を行った。2面の遺構面では、それぞれにおいて道路とそれに沿って建つ小規模な礎石建物、区画溝などを検出し、宅地の変遷を明らかにした。この2面の遺構面の間には、厚さ0.1～0.3mの遺物包含層が存在したが、この土層は重機によって掘り下げを行った。調査の最終段階で、調査区の北壁際を重機によって掘り下げ、断割りを行った。この結果、調査地には南東から北西方向の谷があり、江戸時代初頭に谷を埋める大規模な整地を行ったこと、「一間道」もこの整地層の上に成立していることなどが明らかとなった。その時期は、整地層から出土した土器から17世紀初頭であることが判明した。



図1 調査前全景（南東から）



図2 撮影風景

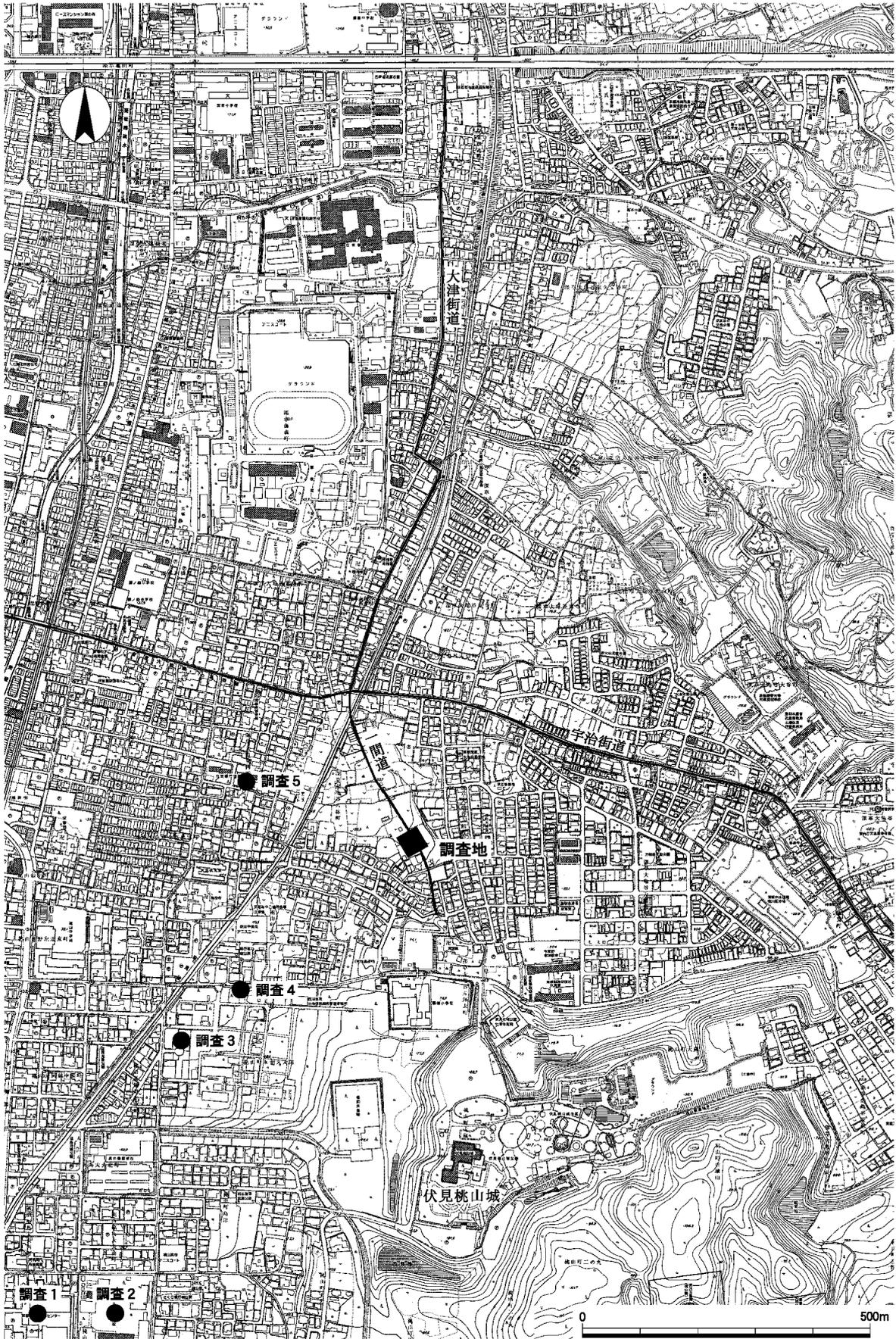


図3 調査位置図 (1 : 10,000)

2 . 遺跡の位置と環境

(1) 位置と環境

調査地点は桃山丘陵西斜面の中腹、丘陵部から緩やかな傾斜地に地形が変化するところに位置し、江戸時代は大亀谷村の一部となっている。伏見城の中枢部はここから南へ約800mに位置する。

伏見城の歴史は、文禄元年（1592）の豊臣秀吉の隠居所として始まるが、その歴史は大きく4つの時期に分かれる。この内、第一期と第二期は指月の丘（現在の観月橋団地一帯）に造られ、文禄5年（1597）の大地震で倒壊する。第三期の伏見城は、大地震の後、場所を木幡山に改めて造られる。これが現在宮内庁の管理地となっている伏見御陵の場所である。この伏見城は慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦で焼失する。第四期は、徳川家康によって再建されたもので、場所は基本的には第一期を踏襲する¹⁾。

現在、伏見の町の街区を形成する縦横の道路は、第一期伏見城の城下町の建設に伴って整備されたものが基本となっている。区画整理対象地の北西には、大津街道と宇治街道（現、墨染通）の交差点がある。大津街道は深草伊達町から勧修寺を経て大津へ向かう街道である²⁾が、伏見城築城に際してそれまで存在した道が城内を通ることになるため、新たに整備されたものである（『伏見鑑』・『拾遺都名所図絵』・『伏見叢書』）。また、調査対象地内には、「一間道」が南東から北西への斜め方向に通り、この大津街道に通じる。また南側は、昭和30年代以降の宅地開発まで残されていた伏見城の惣構の土塁・濠に面している。つまり、調査対象地は主要道とは「一間道」を介して繋がっているだけの閉塞された空間と言える。また、現在、周辺の自然地形は、住宅開発によってわかりにくくなっているが、西へ下る谷筋がいくつか存在した。嘉永元年（1848）に六地藏に通じる道路（宇治街道）が大水により破損している（『宇治久世紀伊各町村沿革調』）。江戸時代には、谷筋からの鉄砲水や、一定の水量のある流路が存在したことがわかり、安土桃山時代に道路を整備するに当たって、このような谷水の制御も問題になったものと考えられる。

(2) 周辺の調査

伏見城の城下町を中心に実施されているこれまでの調査地点は、城跡の西側から近鉄奈良線までの間が多く、江戸時代の絵図や地名などから武家屋敷が集中すると考えられる場所である³⁾。ここでは、今回の調査地点に近接する主な調査例について述べる。1990年に行われた京都府総合教育センターでの調査（図3 - 調査1）では、伏見城期の遺構面が2面調査されている⁴⁾。1993年の桃山高校敷地内の調査（調査2）でも同様に2面の遺構面が確認されており、上層遺構面では大規模な礎石建物が検出されている⁵⁾。1988年に桃山町永井久太郎で行われた試掘調査（調査3）では、伏見城城下町の南北方向の道路、築地、道路と平行する大規模な礎石建物が検出されている⁶⁾。1998年に行われた板橋通の拡幅工事に伴う調査（調査4）では、東西方向の道路と石組み側溝、石垣が延長200m以上にわたって検出されている⁷⁾。1995年の深草大亀谷内膳町のマンション建設

に伴う試掘調査（調査5）では、南北方向の石列とこれに伴う幅2m以上の溝が検出され、屋敷地を画する堀と築地の基底部分と考えられる⁸⁾。

以上のように、周辺の調査では伏見城期の建物跡、道路、石垣などが確認されており、それぞれは築地や石垣で区画されるものが多いことから、武家屋敷に関連するものと考えられる。また、複数時期の遺構面が確認されるのも注意すべき点である⁹⁾。

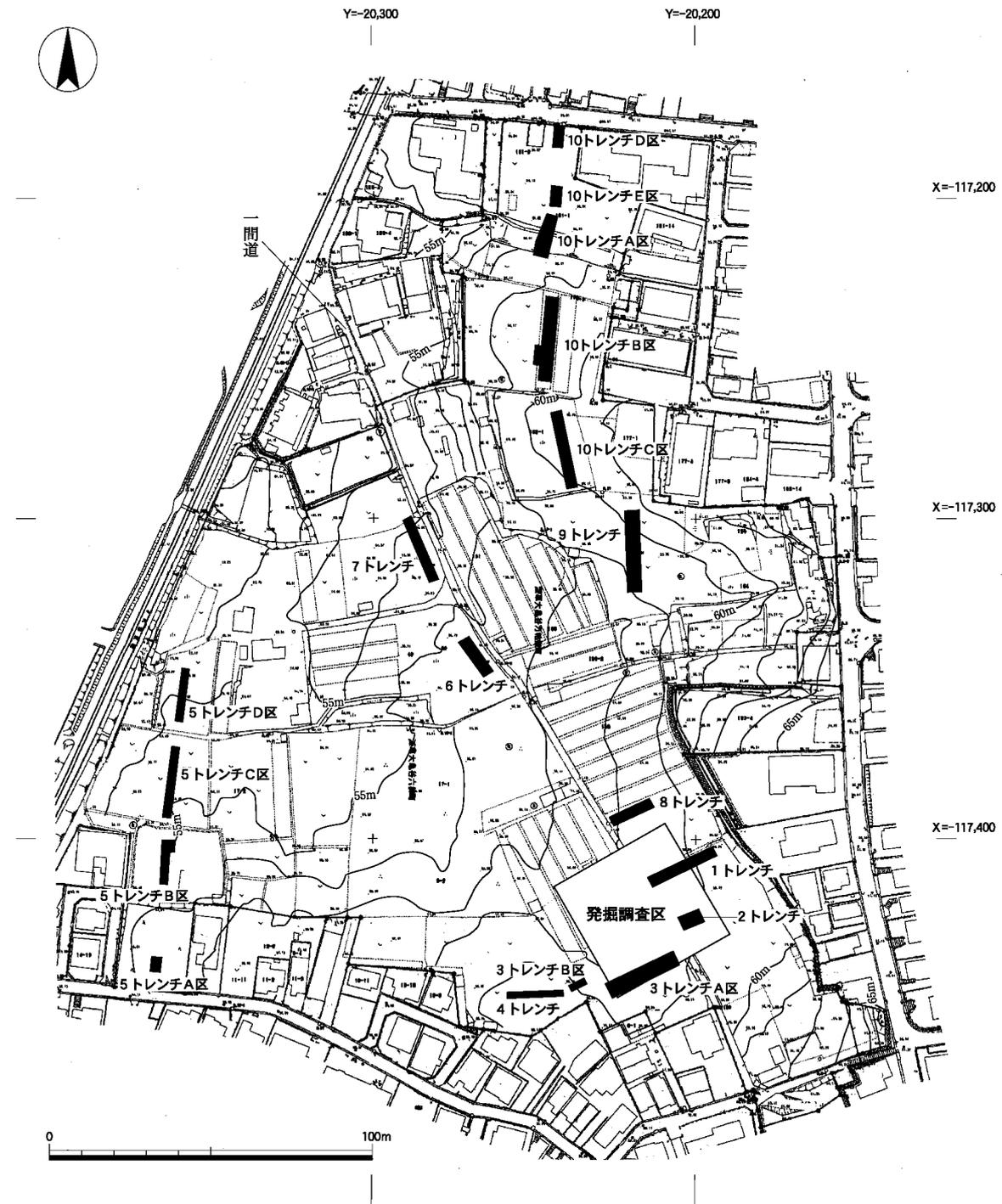


図4 調査区配置図（1：2,000）

3 . 試掘調査

(1) 各調査区の概要

調査対象地は谷に開析された「一間道」が通り、標高53～58mに位置する比較的平坦な低い地区と、標高60m前後のやや高い地区とに分かれる。試掘調査区は「一間道」に面して6箇所、地形の変化する所などに4箇所の計10箇所に設定した。なお、文中の調査区設定方向などは、紛らわしさを避けるため北西方向に振れた方位を北として述べる。

1 トレンチ

南北3m、東西23mの範囲に設定した。江戸時代後期(18世紀)の遺構面を確認した。遺構検出面の標高はトレンチ西端で57.2m、東端で59.1m。発掘調査区に含まれるため、詳細は省略する。

2 トレンチ

南北4m、東西7mの範囲に設定した。江戸時代前期(17世紀)と江戸時代後期(18世紀)の2面の遺構面を確認した。遺構検出面の標高はそれぞれ58.5m、57.9m。発掘調査区に含まれるため、詳細は省略する。

3 トレンチA区

南北3.2m、東西23.2mの範囲に設定した。江戸時代前期(17世紀)と江戸時代後期(18世紀)の2面の遺構面を確認した。17世紀前半の遺構面では礎石建物、水溜などを検出した。発掘調査区に含まれるため、詳細は省略する。

3 トレンチB区(図5)

南北2m、東西5.9mの範囲に設定した。3トレンチA区で検出した建物遺構の宅地割りの奥行規模を明らかにするために設定した。西側に高い、高低差約1mの段差を検出した。A区で検出した町屋の宅地割りと考えられる。これによって復元される宅地の奥行規模は、「一間道」から30mとなる。

4 トレンチ

3トレンチ西側に南北2m、東西20mの規模で設定した。遺構は検出できなかった。地表下0.5mで地山の赤褐色土層を検出した。地山検出面の標高は西端で58.4m、東端で58.0m。

5 トレンチA～D区(図5)

A～D区に分けて設定した。A区は東西方向の尾根筋上にあたり、昭和30年代の宅地造成まで

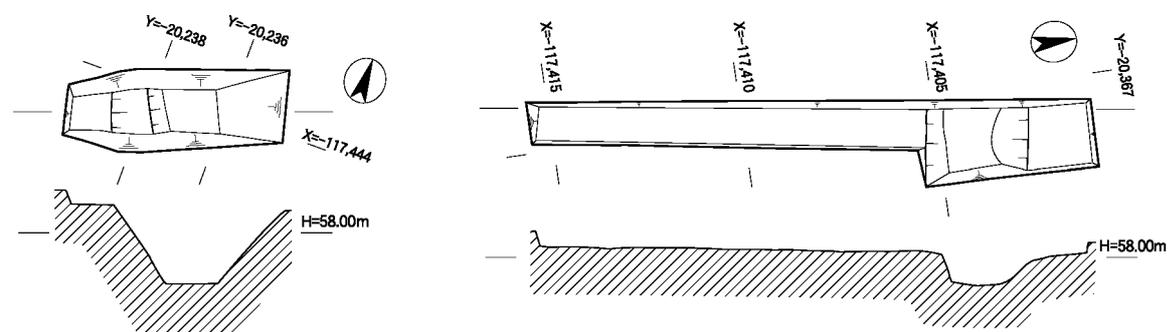
表1 試掘調査遺構概要表

時代	遺 構						
	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	5トレンチ	7トレンチ	8トレンチ	10トレンチ
江戸時代前期			礎石建物、 水溜		礎石		
江戸時代後期	礎石	ピット	溝	溝		土壌	流路、溝、 カマド

残されていた伏見城惣構の堀はこの南側に面する。地表下0.4mで固く締まった地山の赤褐色土層を検出した。顕著な遺構はなかった。地山検出面の標高は56.5m。B～D区の地形は、全体として北に向かって緩やかに下がる。地山はA区と同じ赤褐色土層。遺構としてはB区で東西方向の溝を検出している。溝は幅2.4m、深さ0.9mある。遺物は江戸時代の瓦片が少量出土した。地山検出面の標高はB区で57.3m、D区北端で56.4m。

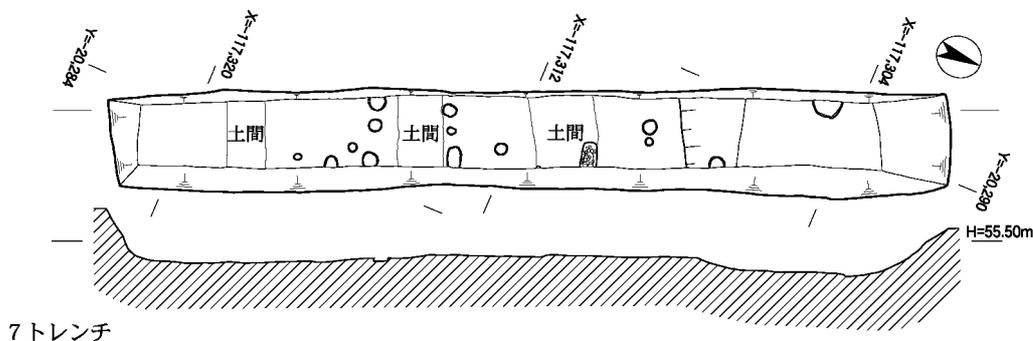
6 トレンチ

東西3m、南北15mの範囲に設定した。地表面直下で地山（淡黄色砂層）を検出した。地山検出面の標高は55.8m。断割を行った結果、2m以上の砂の堆積を確認した。この東側にある谷から流れ込み堆積したものと考えられる。

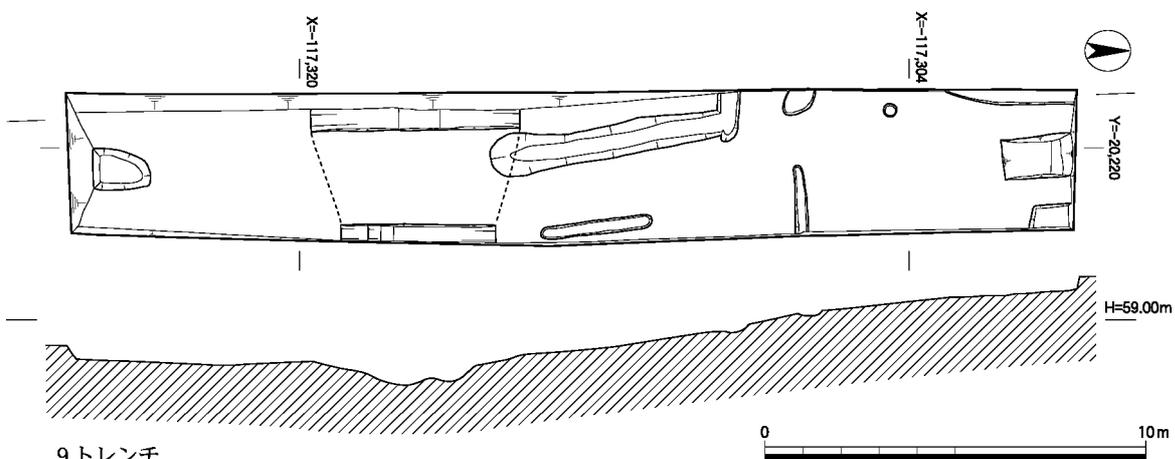


3 トレンチB区

5 トレンチB区



7 トレンチ



9 トレンチ

図5 3・5・7・9トレンチ遺構実測図(1:200)

7 トレンチ (図版 1、図 5)

6 トレンチ北側に「一間道」に面して、東西2.5m、南北22.5mの範囲に設定した。地表下1.5mで江戸時代初頭と考えられる遺構面を検出した。遺構面は地山に似た、整地層と思われる。整地層検出面の標高は55.0m。遺構にはピット、土間などがあり、「一間道」に対して直交する方位にある。ピットは柱の痕跡が確認できないことから礎石の掘形と考えられる。土間はトレンチの幅が狭く明確ではないが、幅は約0.9mある。

8 トレンチ

1 トレンチで遺構を検出したことから、その広がりを確認するため、東西3m、南北13mの範囲に設定した。地表下0.8mで江戸時代後期と考えられるピット、土壌などを検出した。遺構検出面の標高は57.0m。

9 トレンチ (図 5)

南に低い谷地形の傾斜地に東西4m、南北32mの範囲に設定した。地表下0.1～1mで地山を検出した。地山はトレンチのほぼ中央で異なり、北側が赤褐色土層、南側が6 トレンチで検出したのと同じ淡黄色砂層である。淡黄色砂層は谷が深く浸食された後に堆積したものである。また、この砂層上面の一部で南北5m、厚さ1.2mの近世以降の整地層を確認した。谷筋を耕地化するためのものと考えられる。

10 トレンチ A 区 (図版 1、図 6)

墨染通から南へ約30mに位置する比高差約4mの崖面に、東西4m、南北14mの範囲に設定した。崖面の裾には東西方向に延長する現存水路がある。調査の結果、崖面の中位に段を検出した。地山を削りだして設けており、人工的な段である。崖の裾部では流路を検出している。流路は北肩を検出していないため、規模は明確ではないが、深さ約1m、幅約2mある。流路底部から崖面頂部までの高低差は5.5mあり、中程で段を有し控えを持つ。傾斜角は約42°、伏見城外郭ラインを防御するために設けられた施設、城郭用語で言う「切岸」と考えられる。

10 トレンチ B 区 (図 6)

A 区の南側に東西4m、南北27mの範囲に設定した。C 区とともに尾根筋先端近くの高所に位置し、周辺は平坦面となっている。検出した遺構は、江戸時代後期(18世紀)以降の土取穴、土壌、ピットなどである。SK1は土取穴で、南北6m、東西は4m以上、深さ1mある。土取りの単位としては、東西幅2～3mの土壌が東西に連続し、東西方向の長大な溝状になるようである。SK2は南北5m、東西4m、深さ0.3mの不整形な土壌である。

10 トレンチ C 区 (図 6)

B 区の南側に東西3m、南北24mの範囲に設定した。B 区同様に周辺は平坦地である。検出した遺構は、ピット、カマド、溝などがある。溝にはSD9・13・14がある。いずれも東西方向で真西に対して約15°北へ振れる。規模はSD9が幅0.6～1.2m、深さ約0.1m。SD13が幅0.6m、深さ0.08m。SD14が幅0.8m、深さ0.08m。いずれの溝も浅いことから、耕作に伴う削平を受けていると思われる。時期は出土した陶磁器類から江戸時代後期(18世紀)と考えている。また、

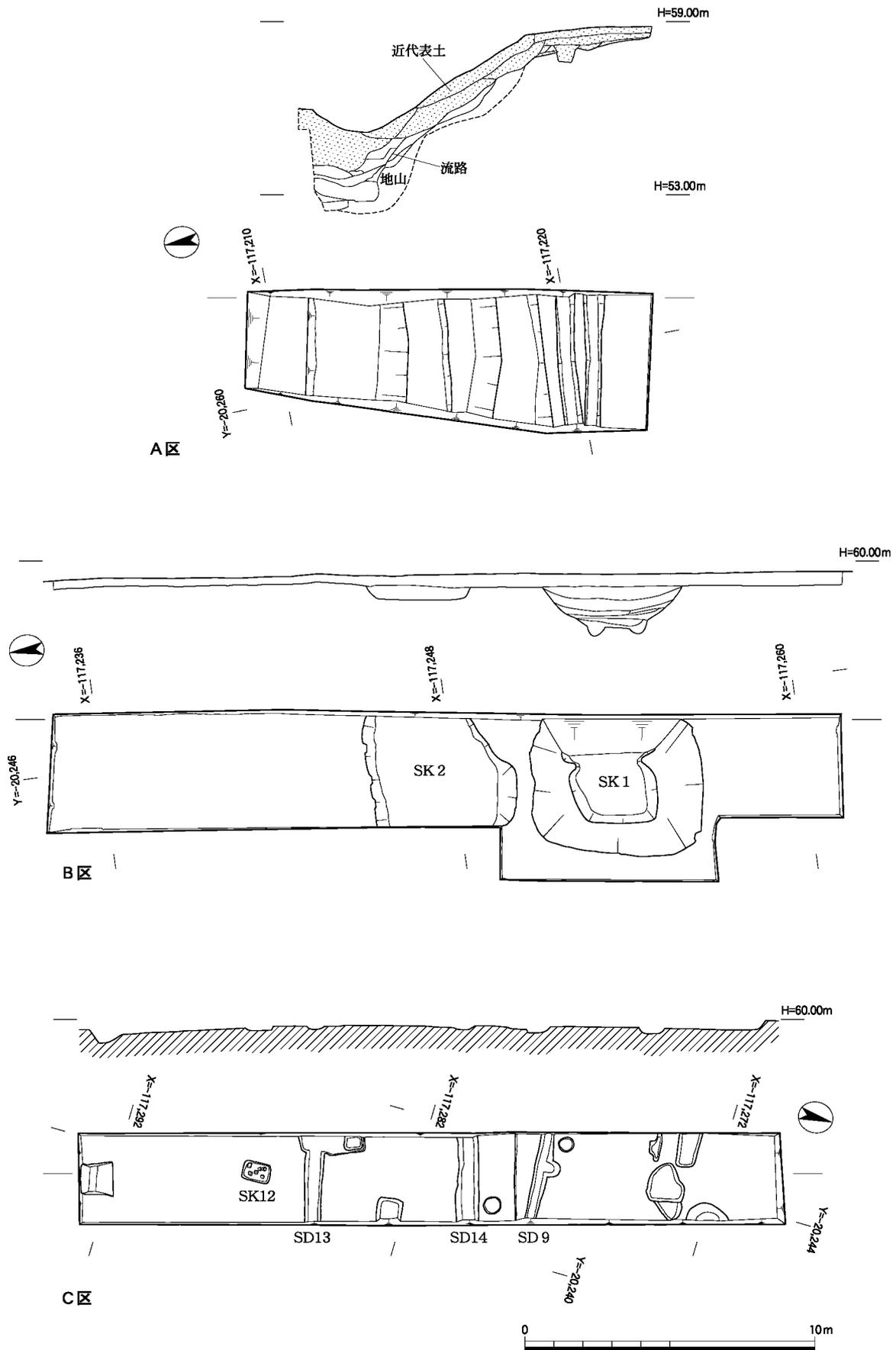


図6 10トレンチA～C区遺構実測図(1:200)

SD13は南側にカマドを検出していることから、建物の雨落溝である可能性もある。SK12はカマドの基底部で、南北0.9m、東西0.6m、深さ0.2mある。カマドの壁面は熱を受けて赤褐色に変色しているが、焼き締まりは弱い。ピットは数基を検出している。礎石の掘形と考えられるが、削平を受けているためか、建物としてのまとまりは明確にできなかった。

10トレンチD・E区

A区の崖面の北側、墨染通との間に設定した。現在この部分は土盛りによって平坦となっているが、昭和40年代以前の地図からは、墨染通からA区の崖に向かって緩やかに下降する地形となっていたことがわかる。地表下2.5mまで掘削したが、地山を確認することはできなかった。土盛りを行った際に攪乱を受けたと考えられる。

(2) 遺物の概要

各トレンチからは、主に近世以降の土器・瓦類が出土している。

図7-1・2は、10トレンチB区のSK2から出土した墨書土器。

1は土師器椀で、器高が低い。外面口縁近くに「隆寺栄」と横書きに墨書されている。2は陶器の蓋で、裏面に「春願カ」の墨書がある。

近世以前の遺物としては、縄目タタキを有する平瓦の小片が8トレンチから、弥生時代あるいは古墳時代に属すると考えられる土器片が6トレンチの砂層から出土している。

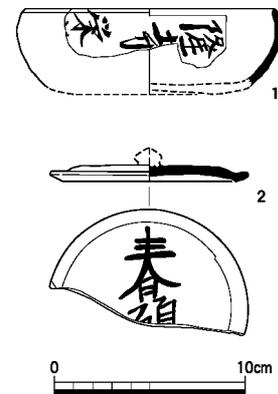


図7 墨書土器実測図(1:4)

表2 試掘調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
安土桃山時代 ～江戸時代前期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入染付、土製品	4箱		0箱	4箱
	軒丸瓦、軒平瓦、金箔軒丸瓦、丸瓦、平瓦	1箱		0箱	1箱
江戸時代後期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、砥石	5箱	土師器1点、施釉陶器1点	0箱	4箱
	軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦	1箱		0箱	1箱
計		11箱	2点(1箱)	0箱	10箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

4 . 発掘調査

発掘調査の調査区は、土地区画整理組合と京都市埋蔵文化財調査センターとが協議の上、調査対象地のほぼ中央部に、試掘調査の1～3トレンチを取り込む形で設定した。

調査では、第1面：江戸時代後期（18世紀）、第2面：江戸時代前期（17世紀前半）の2面の遺構面の調査を行い、さらに下層については、トレンチ北壁際を重機によって部分的な掘り下げを行って確認した。

(1) 層 序

基本層序は次の通りである。地表下 - 0.2mまでが耕土層、 - 0.4mまでが旧耕土層、 - 0.4 ~ - 0.6mまでがにぶい黄褐色砂泥層を主とする18世紀の整地層（第1面の整地層）、 - 0.6 ~ - 0.9mまでが褐色砂泥層を主とする17世紀初頭の整地層（第2面の整地層）、整地層下は黄褐色砂泥層の地山となる。地山面は東から西へ、南東から北西へ傾斜し、第2面の標高は、調査区の南東隅で58.4m、北東隅で57.4m、北西隅で56.2mある。遺構面の土質は「一間道」を挟んで異なり、おおまかには東側が砂泥層で、西側は砂層が堆積する。断割調査によってトレンチ西端では、急激に西側に下がる落ちを確認している。この箇所は、第2面上面から約2m掘り下げたが地山は確認できなかったことから、地形的に谷と考えられ、17世紀初頭に整地によって埋められたと考えられる。

(2) 遺構の概要

第1・2面それぞれの遺構面において「一間道」の直下で道路（路面）を検出している。調査区の南西部では、2つの遺構面の間にさらに礎石などの遺構を確認しているが、調査期間の都合上、確認するだけにとどまった。時期は18世紀と考えられる。近世よりも遡る遺構に関しては、部分的な確認にとどめたが、第2面より下層では確認できなかった。

以下、主要な遺構について第1面と第2面に分けて報告する。なお、遺構の方位は、それぞれ北に対して約30°西に振れているが、文章中の方位の表現は紛らわしさを避けるため、北西方向

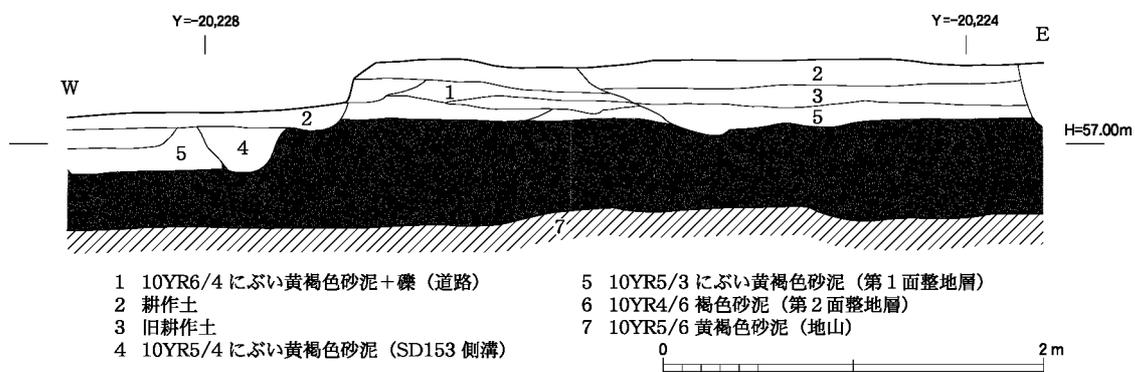


図8 調査区北壁断面図 (1:40)

表3 発掘調査遺構概要表

時代	遺構
江戸時代前期	路面、SB 2・SX483、SD153、SD325、SE466、SK249、SX381、SX465、SX472、SX482
江戸時代後期	路面、SB 1、SD88、SD90・91・116・125・136・145、SD128、SD153、SE111、SE297、SK 4、SK22、SK31、SK38、SK118、SK172、SK228

に振れた遺構方位を北として述べる。

1) 第1面の遺構

18世紀後半を中心とする遺構面である。「一間道」直下で道路(路面)を検出している。道路の東側は、東へ向かってわずかに高まる。道路を境にして西側は、検出路面から約20cm低くなり、



図9 第1面遺構実測図(1:300)

東から西へわずかに下降する。道路の両側約10mの範囲に集中する状態で、建物に関連する礎石、礎石の抜取穴などを検出している。建物規模を復元できるものは少ないが、道路の両側に小規模な建物が道路に沿って存在していたことが窺える。

SB 1 東西棟の礎石建物で、梁行3.5m×桁行8mの規模を有する。掘形は円形を呈し、径約0.5m、礎石の大きさは0.2～0.3mある。礎石は抜き取られて残らないものもある。柱間は一定しない。道路に面して間口を設ける建物と考えられる。

路面（図版2） 延長39mにわたって検出している。幅は1～2mと一定しないが、狭い部分は後世の削平の影響によるものと考えられ、本来の道路幅は2mであることが側溝の位置などからわかる。路面には小石を敷いており、18世紀代において少なくとも3回の修復が認められる。

SD153 道路の西側溝で、幅0.4～0.6m、深さ0.1mを測る。トレンチの中央では途切れる。道路の側溝は西側のみで東側は検出できなかった。

SD90・91・116・125・145・136（図版2） 道路西側で検出した屋地割りの区画溝。幅0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。SD136のみが道路側溝とつながっている。これ以外の溝は道路にまで延びないが、本来はすべての溝が側溝につながっていたと考えられる。溝と溝の間隔は4～8m、道路から西辺の溝までの距離は約17m。これによって一つの宅地の規模は、約60～140㎡であったことがわかる。また、それぞれの溝は隣の溝とつながり溝を共有しているが、SD116とSD125は溝を共有せず、溝と溝は2mの間隔がある。この溝が、本来道路まで延びていたとすると、この間は表から裏に通じる路地になる可能性がある。

SD128 幅1m、深さ0.3～0.5mを測る南北方向の溝。宅地の裏側の排水を促すための溝と考えられる。

SD88（図10） 幅1.2～1.5m、深さ0.9mを測る南北方向の溝。調査区の南北のほぼ中央付近で最も浅く、その両側に向かって深くなっていく。SD90等の屋地割りの区画溝よりも新しいことが重複関係からわかる。

SK 4（図11） 径1.4mのやや不正形な土壇。検出面より0.15m掘り下げたところで中央に径0.6m、厚さ0.15mの粘土層を検出、この層の下より型押し整形の小型の陶器がまとまって出土。

SK22（図11） 径0.5m、深さ0.2mを測る土壇。深鉢形の瓦器出土。

SK31（図版3、図11） 径1m、深さ0.4mを測る土壇。10～20cmの石を詰める。

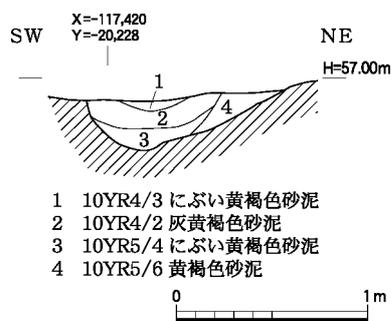


図10 SD88断面図（1：40）

SK38（図11） 径0.8m、深さ0.2mを測る土壇。5～10cmの石を詰める。

SK118（図版3、図11） 東西1.0m、南北1.5m、深さ0.4mを測る石が詰められた土壇。SD88の南北ほぼ中央で、同一面にて検出。土壇の中には2～10cmの礫が底まで詰められており、その上面は厚さ5cmほどの黄褐色の砂泥層によって覆われていた。SD88の最も浅いところに位置すること、SD116とSD125の間に想定した表から裏に通じる道の部分に当たるこ

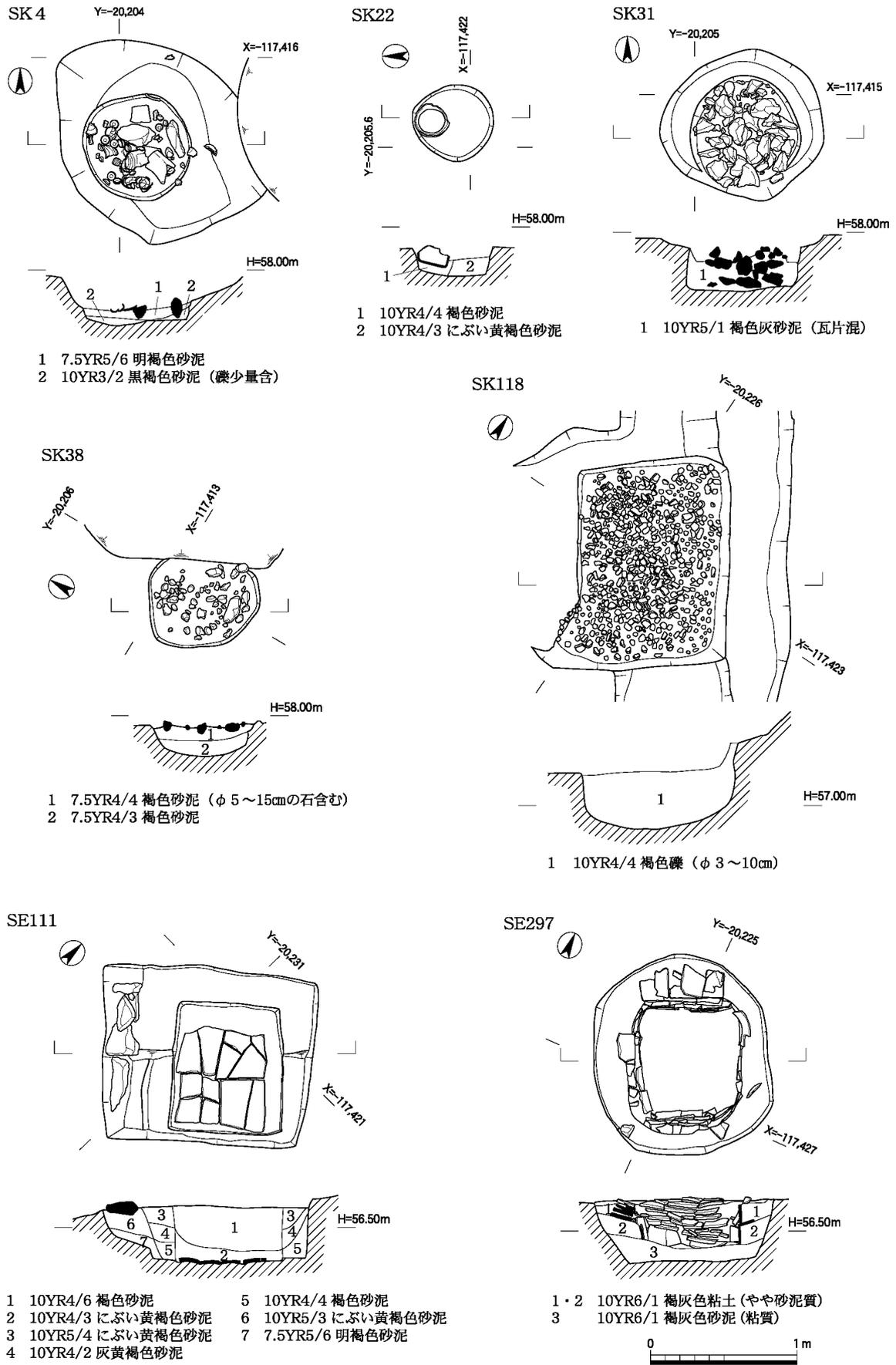


図11 SK 4・22・31・38・118、SE111・297実測図 (1 : 40)

となどから、SD88の土橋と考えられる。この土橋は橋の基礎となる部分の崩壊を防ぐため、礫を詰め透水性を持たせたものであろう。

SK172 1.5m×1.0m、深さ0.2mの不整形な土橋。鉢形の瓦器が出土する。

SK228 径1.3m、深さ0.4mの土橋。埴埴、瓦器香炉、肥前陶磁器などが出土。

SE111 (図版3、図11) 南北0.9m、東西0.7m、深さ0.4mの長方形を呈する水溜。底部には平瓦を4枚敷き並べる。壁面は垂直。西側には1辺20cm程の石列があり、断面観察から、石組から木枠によるものに作り替えたと考えられる。

SE297 (図版3、図11) 南北0.9m、東西0.7m、深さ0.35mを測り、長方形を呈する瓦積みの水溜。瓦の積み方は南北の両壁と西壁の一部を瓦の側面を横に見せる平積み、東西壁は平瓦を立て並べて壁面を作っている。瓦積みより下には厚さ0.1～0.2mの粘質の砂泥層が敷かれており、

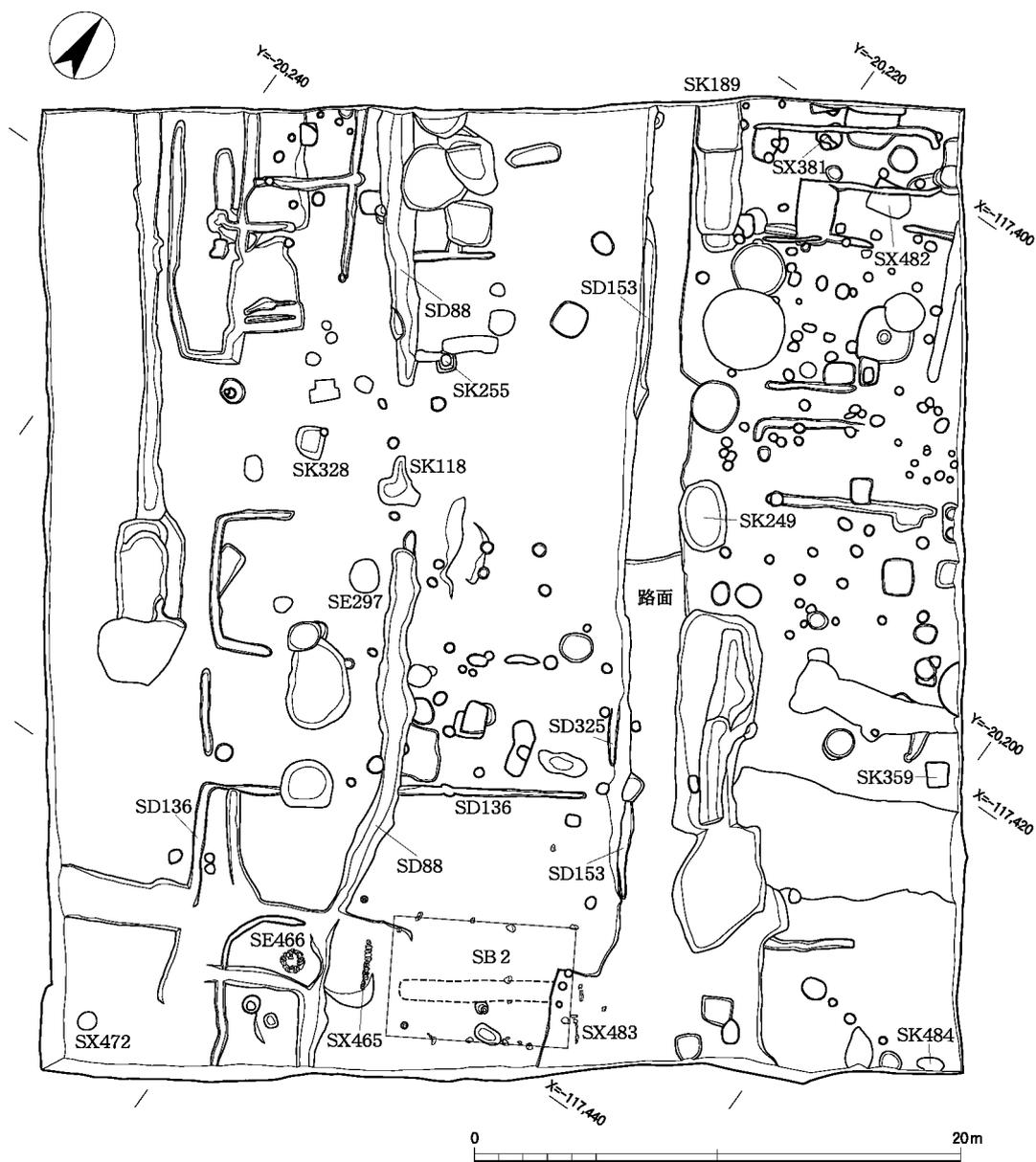


図12 第2面遺構実測図 (1:300)

井戸ではなく、水溜と考えられる。

2) 第2面の遺構

全体に遺構の遺存状態は良好ではなかったが、第2面でも路面とその両側で礎石、土塊、水溜などを検出しており、道に面してその両側に建物が存在したものと考えられる。SK249からは17世紀前半の陶磁器類と礎石に使われたと思われる石が破棄された状態で出土しており、この時期に宅地としての土地利用が一度途絶えることを示している。

SB 2・SX483(図版4、図13) 梁行5m×桁行7.5mの東西棟の礎石建物。建物中央には幅0.7~0.9mの土間(通り庭)がある。土間は非常に細かい泥砂層を突き固めて造られている。建物の間口側に平瓦を立て並べた土留め施設SX483がある。

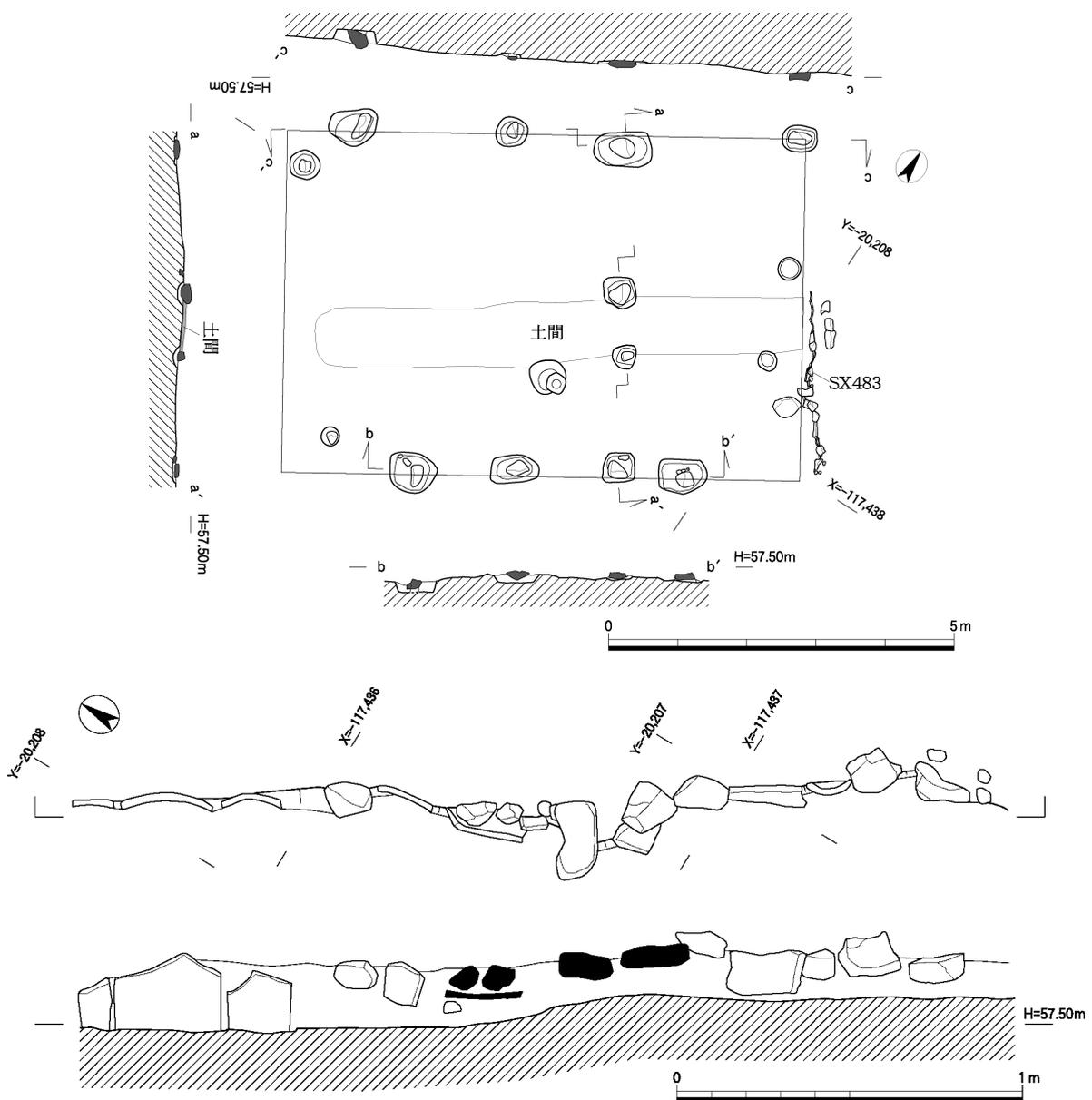


図13 SB 2・SX483実測図(1:100、1:20)

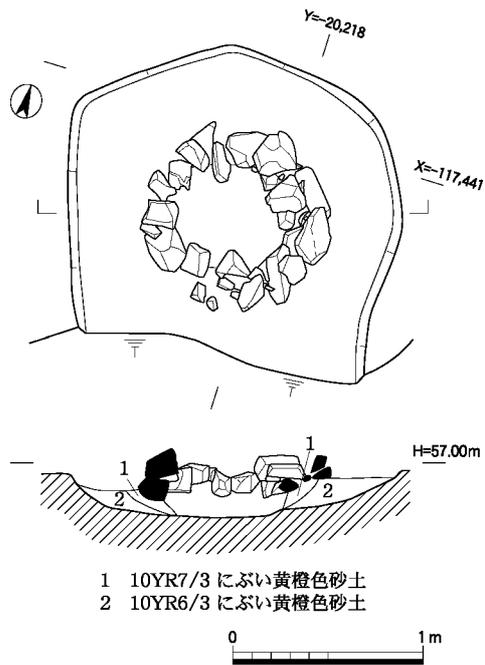


図14 SE466実測図(1:40)

路面 第1面と同じ位置の下層で検出している。幅1.8~2.4m。この時期の路面敷はほとんど遺存せず、側溝も西側側溝の一部しか残っていなかったため、路面幅を確定することは難しい。しかし、北壁の断割による断面観察によって、17世紀初頭に行われた整地時に道路部分をやや盛り上げていることが観察でき、この時期に道路が作られている事がわかる。

SD325 幅0.4m、深さ0.2mを測る溝。延長約3mしか検出していないが、道路西際でそれに沿って位置することから、道路の西側溝と考えられる。

SE466(図版5、図14) 径0.6m、深さ0.3mの円形の石組み遺構。石の大きさは1辺0.15~0.3m。底には粘土などを貼った痕跡は認められないが、水が湧く深さでもないため、水溜め施設と思われる。

る。SB2の西側。

SK249 道路の東際、トレンチ中央で検出した土壌。東西1.2m、南北2.5m、深さ0.8mを測り平面形は不整形である。中からは17世紀前半の陶磁器類、礎石に使用されたと考えられる30cmほどの扁平な石が10数個出土した。

SX465(図15) SB2西側に位置する南北2mの石列。径0.2m程の石を南北に並べている。SB2の位置が道路から西下がりの傾斜地にあるため、地盤の土がずれるのを防ぐための石列と考えられる。

SX472(図版5、図16) SB2の西側で検出した埋め糞遺構。径0.7m、深さ0.5mある。糞は瓦質。口縁部は遺存せず底は抜かれている。SB2の宅地内のトイレと考えられる。

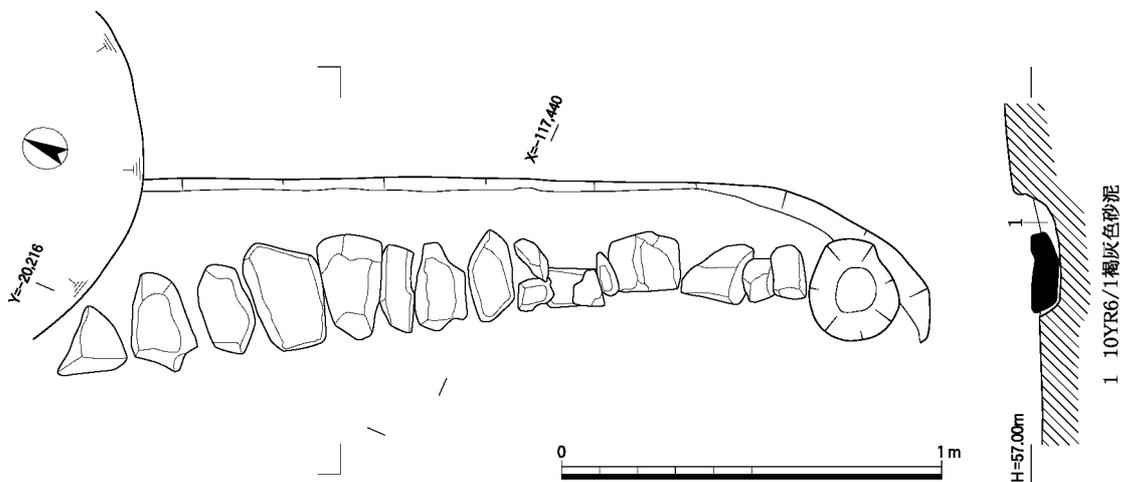


図15 SX465実測図(1:20)

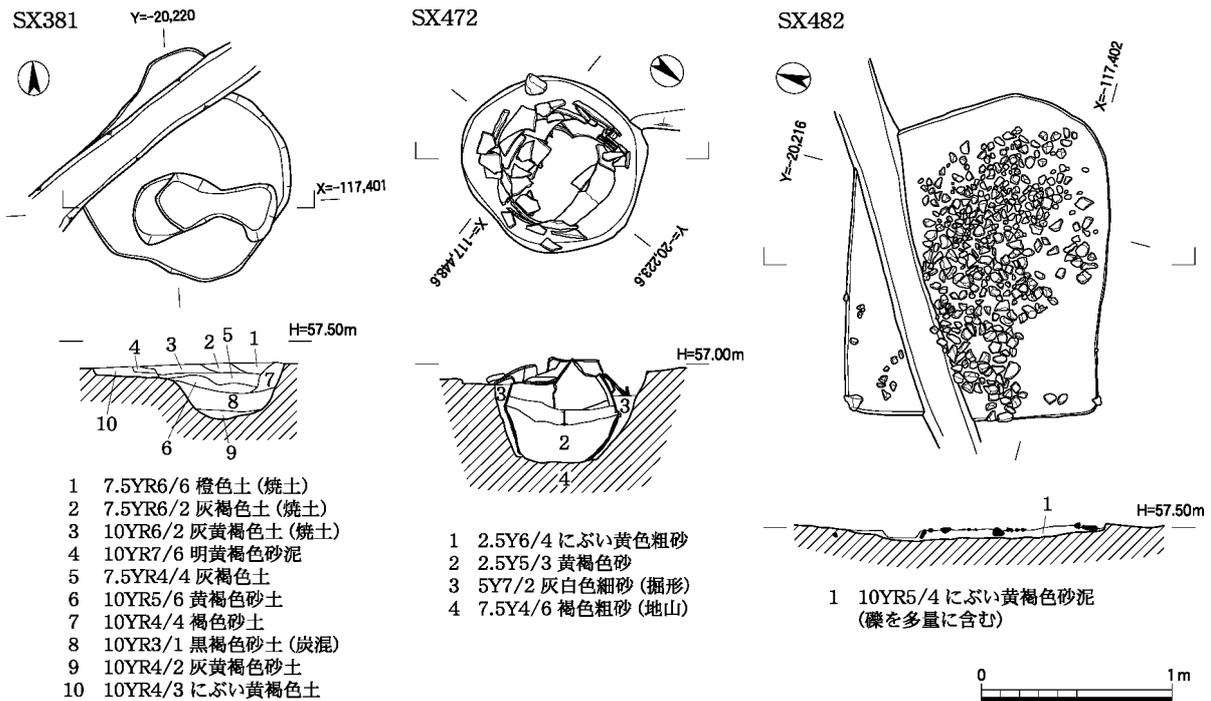


図16 SX381・472・482実測図(1:40)

SX381(図16) 径1.2mの掘形をもつカマドの底部。火床となる部分の深さは検出面より0.1m程しかないが、掘形は0.3mの深さを持ち砂質の土で埋められている。検出路面から約6mしか離れていないため、屋内に存在した可能性が高い。

SX482(図版5、図16) 5~10cmの礫を径1.0mの範囲に敷いている。土間の基礎とも考えられるがこの礫の上面でわずかであるが炭・焼土を確認しており、カマドの基底部とも考えられる。

(3) 遺物の概要

遺物は整理箱にして43箱出土した。土器類、瓦類、土製品、石製品などがある。全体に小片が多い。第2面では16世紀末から17世紀前半までの遺物が主に出土した。第1面整地層は多くの遺物を包含していたと考えられるが、重機による掘り下げを行ったため出土量は少ない。第2面整地層も同様で、部分的な断割に伴って出土したものである。

土師器の皿は、SK4からまとまって出土した以外に時期を通して出土量は少なく、図示できるものは少ない。16世紀末から17世紀前半の陶磁器類は、破片数にして150点余りが出土した。このうち、瀬戸・美濃陶器が約6割を占め、大窯期と連房窯の製品が混在する。その他、唐津が約3割。磁器類は輸入染付がわずかに3点、伊万里はない。焼締陶器では、信楽が約5割を占め、他は丹波と備前が同程度である。18世紀後半から19世紀初頭の遺物は、SK4出土以外のものは、ほとんどが小片であり、図示できるものは少ない。陶磁器類では、伊万里、肥前陶器が主体をなす。瓦質土器は、各整地層・各遺構から出土する。近世以前の遺物は少なく、凸面に縄目を有する平瓦の小片、庄内併行期と考えられる甕の小片が出土している。

1) 第2面出土遺物

第2面整地層(図17-1~14)

1~4は唐津。内面施釉、外面は高台近くまで施釉。1は椀の底部で、施釉部の色調は灰黄色、露胎部は橙色。2は皿で、施釉部の色調は灰オリーブ色、露胎部はにぶい赤褐色。

5~13は瀬戸・美濃。5・6は天目椀。5は削り出し輪高台、6は内反り高台。ともに内面および外面体部下半まで施釉する。5の施釉部の色調は黒色、6は褐色。7~10は灰釉皿。7は内外面全面に施釉する。色調はオリーブ色を呈し、内面底部と外面底部に輪トチン跡が残る。8・10は外面底部に輪トチン跡が残る。色調はともにオリーブ黄色。9は内面底部を蛇の目状に削り出し、この部分は釉薬を掻き取る。重ね焼き痕が残る。底部を除いた内面と外面高台脇まで施釉する。施釉部の色調はオリーブ色。11・12は志野皿で、白色を呈する長石釉を内外面全面に施釉する。11は内外面底部にピン跡が残る。12は内面底部に目跡、外面底部に輪トチン跡が残る。13は志野向付で、白色の長石釉を遺存部全面に施釉する。鉄釉で描く草文は薄い。

14は輸入染付の皿。全体にややくすんでおり、呉須はにじみ、焼成はやや不良。高台畳付けは、施釉後に掻き取り、高台内側に砂が付着。

SX465(図17-15・16)

15・16は瀬戸・美濃の灰釉皿。15は内外面底部に輪トチン跡、内面底部と外面体部下半に目跡が残る。16は内面底部を施釉後に蛇の目状に掻き取る。内外面底部に輪トチン跡が残る。

SK255(図17-17~20)

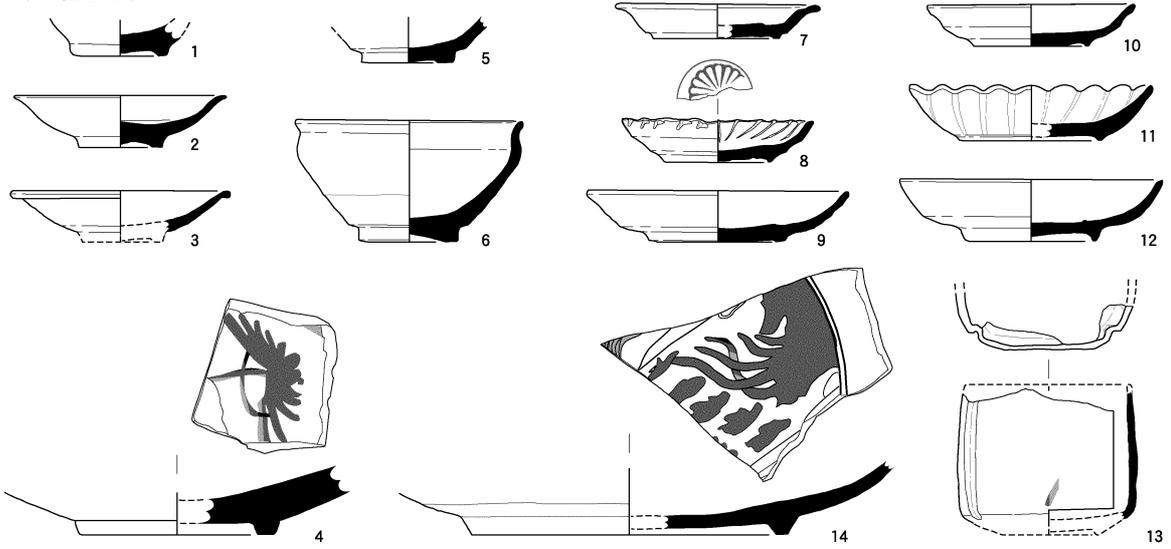
17・18は瀬戸・美濃の灰釉皿。17は内外面底部に輪トチン跡が残る。18は内面底部を施釉後に蛇の目状に掻き取る。内外面底部に輪トチン跡が残る。

19・20は瓦器。19は羽釜。内面口縁部まで煤付着。20は播鉢。

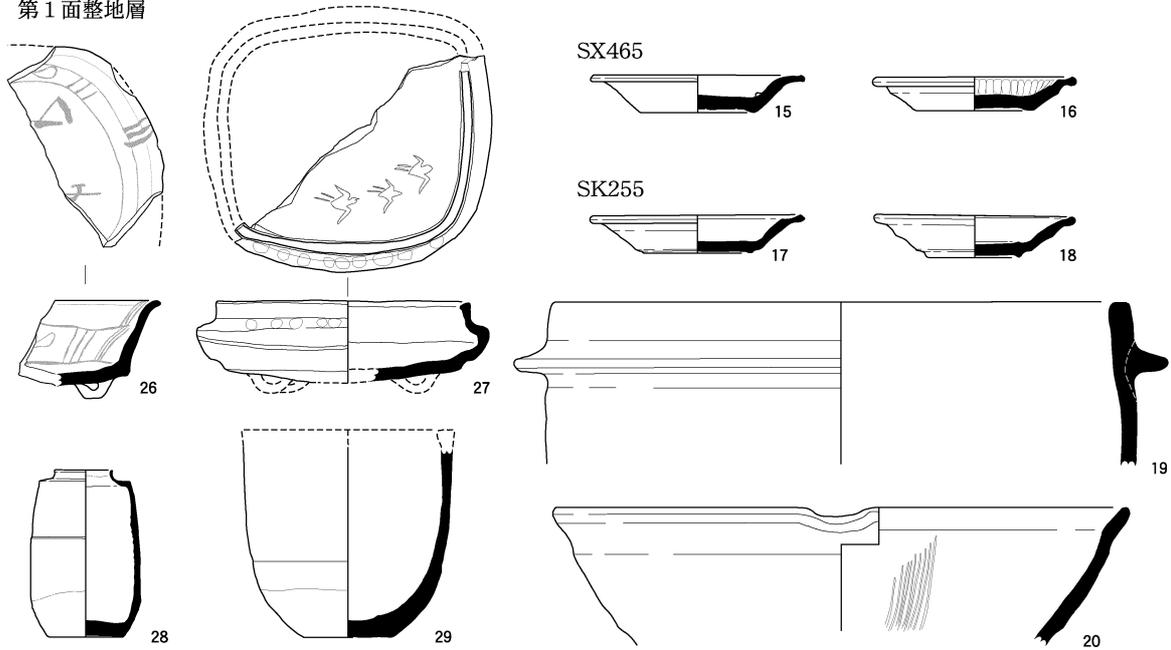
表4 発掘調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	弥生土器、平瓦	1箱		1箱	0箱
安土桃山時代 ~江戸時代前期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入染付、焼塩壺	14箱	土師器2点、瓦器3点、施釉陶器42点、焼締陶器6点、輸入染付2点、土製品1点	3箱	7箱
	軒丸瓦、軒平瓦、金箔軒丸瓦、丸瓦、平瓦	15箱	軒平瓦1点	1箱	13箱
江戸時代後期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、染付、焼塩壺、坩堝、伏見人形、硯、砥石	12箱	土師器11点、瓦器3点、施釉陶器3点、焼締陶器2点、染付9点、軟質施釉陶器15点、焼塩壺1点、坩堝1点、土製品1点	1箱	10箱
	軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦	1箱		0箱	1箱
計		43箱	103点(6箱)	6箱	31箱

第2面整地層



第1面整地層



SE466

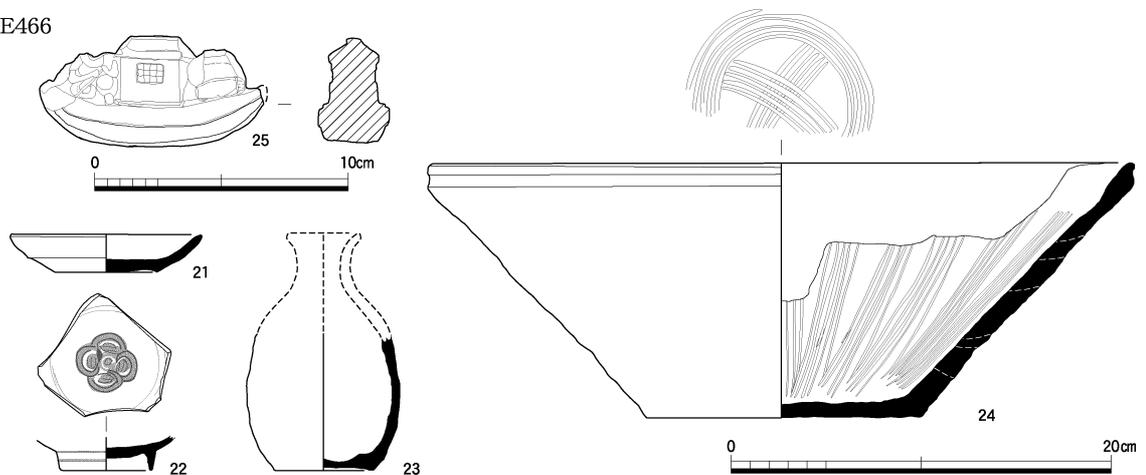


図17 第2面出土遺物実測図1 (1:4、25のみ1:3)

SK249

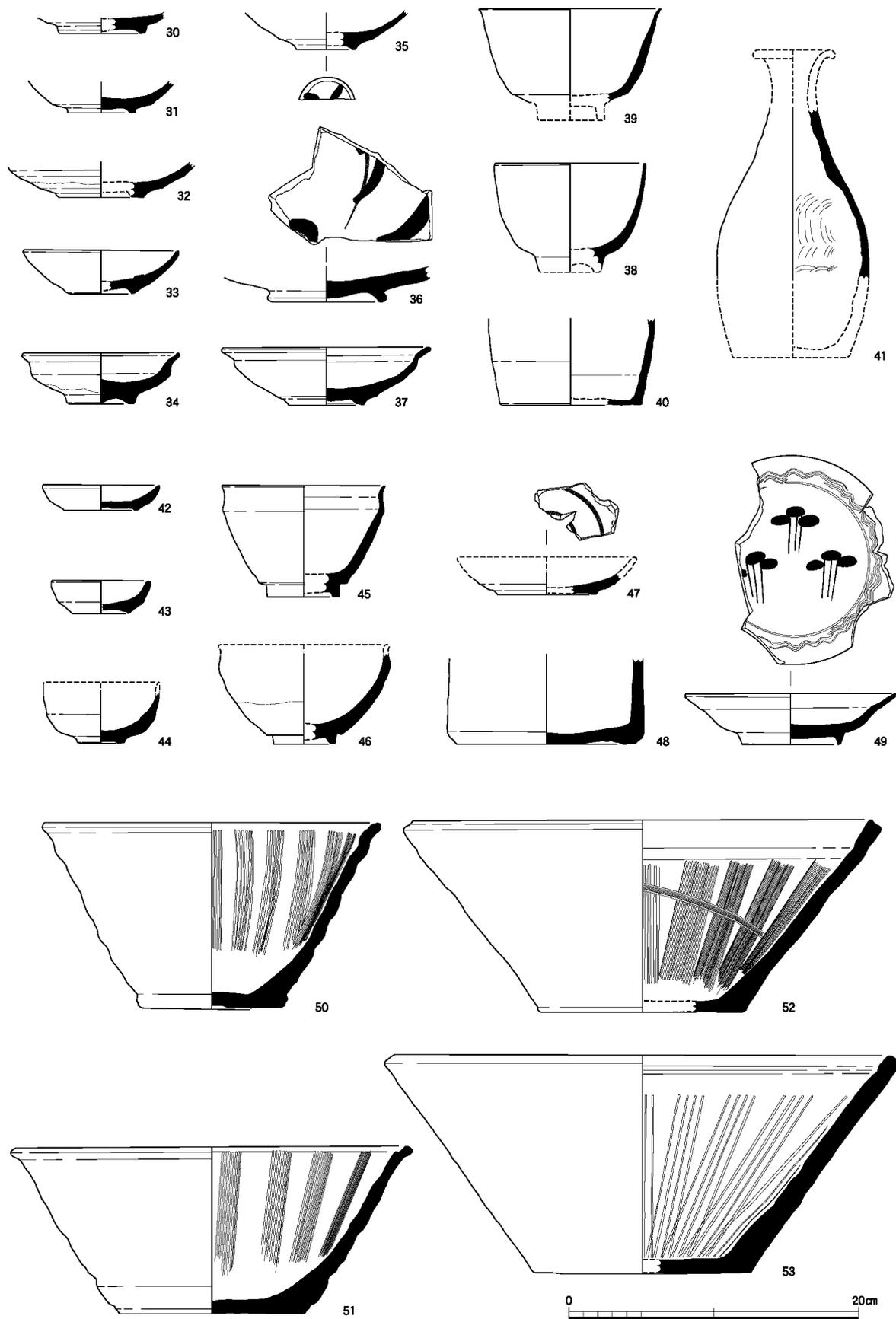


图18 第2面出土遺物実測図2(1:4)

SE466 (図17 - 21 ~ 25)

21は瀬戸・美濃皿。長石釉を内外面全面に施釉する。外面底部に目跡が残る。

22は輸入染付碗の底部。高台畳付けの釉は丁寧に掻き取る。

23は備前壺。色調は明赤褐色を基調とし、外面体部下半と底部で火襷あり。外面底部に径 1 cm の刻印あり。

24は丹波播鉢。播り目は櫛引により 5 条を 1 単位とする。胎土に白色粒が多い。

25は宝船を意匠とした土製品の玩具。七福神の顔は欠損するが、右が俵を抱えた大黒、左がえびすであろう。型作りで中実。

第 1 面整地層 (図17 - 26 ~ 29)

26~29は瀬戸・美濃。26は志野鉢で、白色の長石釉は全面に厚く掛かる。外面底部に目跡が残る。27は鼠志野鉢で、全体に鉄分の多い土で化粧した上に長石釉を厚く掛ける。内面は一部掻き落として水鳥文を描く。外面底部に目跡が残る。28は茶入で、内面口縁部から外面体部下半まで薄く鉄釉を施し、口縁部から体部上半にかけては 2 度掛けを行う。色調はにぶい赤褐色。外面底部に糸切り痕。29は深鉢で、内面から外面体部下半にまで薄く鉄釉を施し、口縁端部は掻き取る。底部外面に糸切り痕。

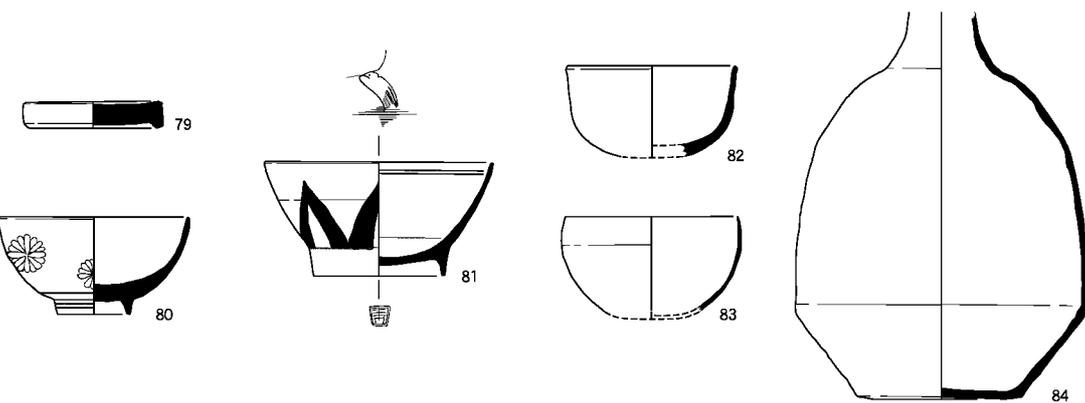
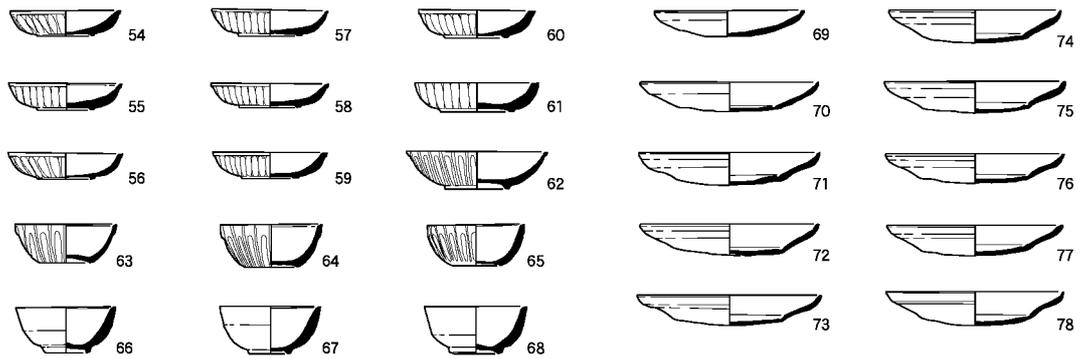
SK249 (図18 - 30 ~ 53)

17世紀前半の遺物が比較的まとまって出土している。出土土器破片数170点。内訳を比率で表すと次のようになる(小数点以下四捨五入) 土師器皿 6%、瓦質・土師質土器15%、瀬戸・美濃 22%、唐津21%、信楽25%、丹波 6%、備前 4%となり、磁器類では、輸入染付の小片が 2 点、伊万里はない。土師器は細片で図示できるものはない。

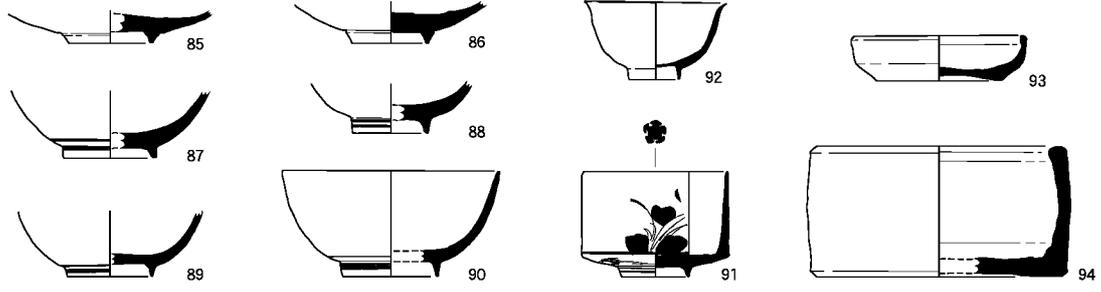
30~41は唐津。30~37は皿で、外面底部は長石釉を施さない。30と37は内面施釉、外面部分施釉。施釉部の色調は灰オリーブ色、露胎部は橙色。31は内面施釉、外面部分施釉。施釉部の色調はオリーブ黄色、露胎部は浅黄色。内面に胎土目跡が残る。33は内面全面施釉、外面口縁部付近まで施釉。施釉部の色調は灰白色。内面に胎土目跡が残る。34は内面全面施釉、外面部分施釉。施釉部の色調はにぶい褐色、露胎部は明褐色。内面に胎土目跡が残る。35は皿の底部で、内面施釉。施釉部の色調はオリーブ黄色、露胎部は明褐色。内面底部に胎土目跡が残る。高台底部に墨書あり。36は内面施釉。施釉部の色調は灰オリーブ色、露胎部はにぶい黄橙色。内面には鉄釉で植物文様を描き、胎土目跡が残る。37は内面全面施釉、外面部分施釉。施釉部の色調は灰色、露胎部はにぶい褐色。38~39は碗。38は灰褐色の鉄釉を施釉、内面全面施釉、外面高台脇まで施釉。露胎部の色調は灰白色で、焼成は磁器質に近い。39は内面全面施釉、外面は高台部まで施釉。施釉部の色調はにぶい橙色。40・41は壺。40は底部で、施釉は外面は底部まで行き、釉薬は遺存部上部では 2 度掛けを行う。色調は外面上部が黒褐色、下部が褐色、内面は明黄褐色。41は頸部より上と底部を欠く。外面施釉。色調は外面黒褐色、内面は褐色。

42~49は瀬戸・美濃。42は皿で、外面底面まで灰釉を施す。43・44は志野小型碗で、内面および底部外面まで白色の長石釉を全面施釉する。44には外面高台脇にピンが残る。45は織部天目

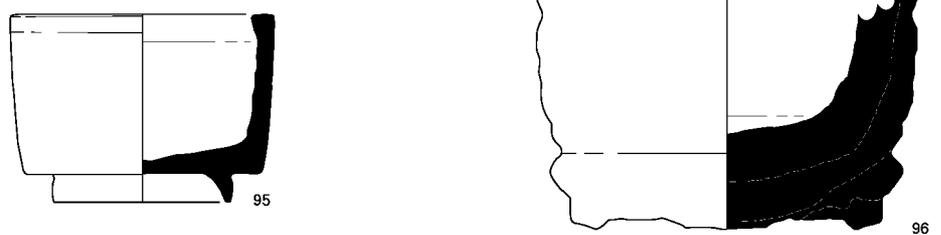
SK 4



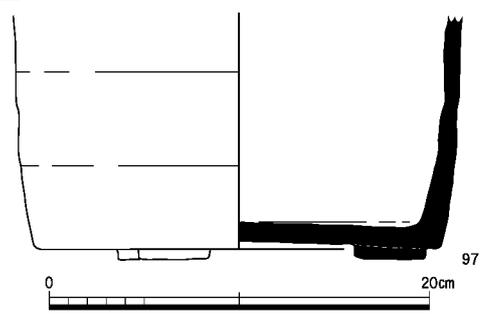
SD88



SK228



SK22



SK172

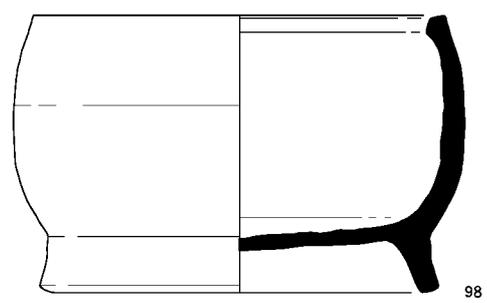


图19 第1面出土遺物実測図(1:4)

椀で、内面および外面高台脇まで緑釉を施す。46は天目椀。47は志野織部皿で、長石釉を高台裏を除いて施釉、内面には鉄釉で文様が描かれる。48は鉢形を呈する。褐色の鉄釉を底部は除いて施釉、底部外面に糸切り痕を残す。49は織部皿で、長石釉を内面全体に、緑釉を口縁部付近内外面に施す。口縁部内面には3条1単位の櫛描文を、内面体部屈曲部には沈線を巡らす。内面底部には重ね焼き痕が残る。

50・51は信楽播鉢。播り目は6条1単位。他に5条1単位が2点ある。

52・53は丹波播鉢、播り目はともに4条1単位。

2) 第1面出土遺物

SK4 (図19 - 54 ~ 84)

54 ~ 68は型押し成形による軟質施釉陶器。焼成は軟質で土師器に近い。54 ~ 65は外面に菊花を表し、形態は金属製の化粧道具(紅入れ)と同じ。内外面全面に透明釉を施し、内面底部には筆書きで径1cmほど円形に緑釉を施す。61のみ2箇所施釉。素地はよく精製されているが、色調はやや黄色をおびた白色の54 ~ 61と、明黄褐色の62 ~ 68に分かれる。京都産と考えられる。

69 ~ 78は土師器皿。形態・色調から2つに分かれる。69は全体にやや丸みをおび、口縁部のみやや立ち上がる。色調は黄橙色。70 ~ 78は口縁部と体部中央で強く屈曲させる。色調はやや赤みのある橙色。

79は焼塩壺の蓋。

80・81は肥前染付。80の外面の菊花文はコンニャク印判により、全体の色調は緑灰色。81はいわゆる広東椀。

82・83は肥前陶器椀。82は内面および高台脇まで施釉。胎土は精良で、焼成は磁器質に近い。色調は黄色みをおびた白色。

84は備前壺。底部の一部に砂が付着。

SD88 (図19 - 85 ~ 94)

85 ~ 91は肥前染付。85・86は皿の底部で、共に内面底部を蛇の目状に釉を掻き取り、砂が残る。胎土は灰白色を呈する。87 ~ 91は椀。87・88は内面底部の釉を蛇の目状に掻き取る。胎土は灰白色。呉須の発色はにぶい。89 ~ 91の胎土は白色、呉須の発色も鮮やかである。

92は肥前陶器椀。釉を内面と外面で掛

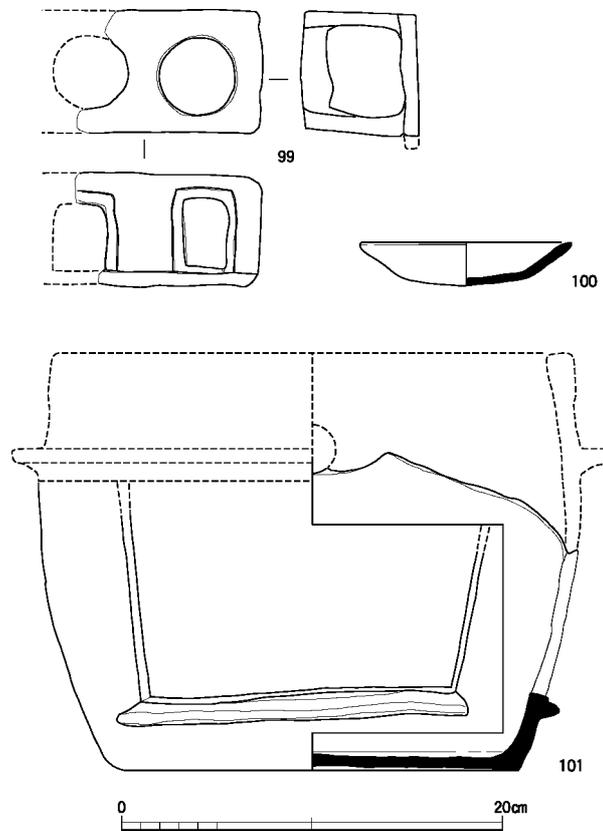


図20 SK21・477出土遺物実測図(1:4)

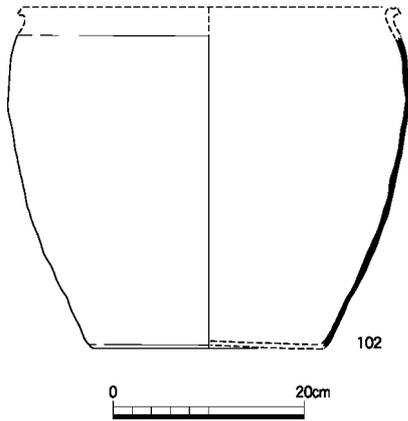


図21 SX472出土瓦器甕実測図（1：8）

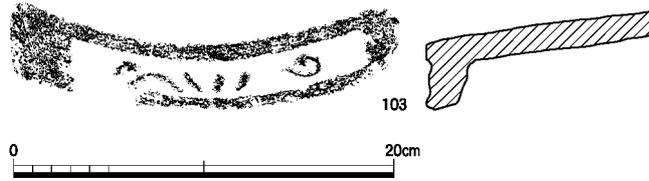


図22 第2面整地層出土軒平瓦拓影・実測図（1：4）

け分け、内面は淡黄色、外面は灰黄色、胎土は黄褐色。

93は土師器皿。回転成形、外面底部はヘラ切り。

94は焼締陶器鉢。

その他の遺構（図19 - 95～98）

95・96はSK228出土。95は鉢形の瓦器香炉。内外面底部まで黒漆を塗る。96は埴塼。

97・98は深鉢形の瓦器。内面体部上半に煤が付く。97はSK22、98はSK172出土。共伴遺物には、ともに18世紀代の肥前磁器がある。

3）その他の出土遺物（図20～22）

99はSK21出土のカマド形の土製品。共伴遺物に肥前陶磁器がある。

100・101はSK477出土の土師器。101はコンロ前面に火入れ部を方形に設け、背面に径3cm程の孔を穿つ。内面は底部から5cmより上に煤が付く。

102はSX472出土の瓦器甕。

103は第2面整地層出土の軒平瓦。

5.まとめ

伏見区深草大亀谷六躰町・万帖敷町の区画整理事業に伴う調査を、2001年の試掘調査、2002年の発掘調査と2ヶ年に渡って行った。これによって伏見城の城下町の一端を明らかにすることができ、この地区の伏見城城下町の位置付け、また土地利用の変遷を明らかにする事ができた。

以下に、その成果について述べる。

「一間道」の位置と敷設時期

今回検出した道路「一間道」と、それに面する小規模な宅地・建物の敷設時期は、出土した遺物を検討することによって明らかとなる。路面下の整地土層中より出土した瀬戸・美濃陶器は、大窯期の遺物も存在するが、連房窯焼成の器面に光沢のある志野が出土する。このことから、その時期は17世紀に入ってからであることがわかる。また、伏見城の時期の瓦や唐津が一定量共伴する事も、これを証左する。

「一間道」の北側延長は、宇治街道（現、墨染通）と交差して、大津街道へ通じる。「一間道」は、2つの街道の交差点から南側に設けられた道路ということになる。近世の大亀谷村は、文禄年間に伏見九郷の一つ北内村が、豊臣秀吉によって整備されたこの二つの街道筋に移されたものが始まりである（『京都府地誌』『紀伊郡村誌』）。今回の調査で検出した建物・宅地は、道路に面して間口を開けており、道路がその存在の重要な要素となっている。このことから、この宅地は一般集落ではなく、江戸時代になっても徳川幕府の西国経営の拠点として機能を続けた伏見城とその城下町の周縁部に成立した町屋である可能性が高いと考えられる。また、「一間道」は新たな宅地開発の為に設けられた街道からの枝道¹⁰⁾と言える。

建物の規模・構造

17世紀前半の建物跡とそれに付随するカマドなどを、試掘調査の1～3・7・8の「一間道」に面した各トレンチ、発掘調査区でも道路の両側に検出した。

発掘調査で検出した建物SB2は、梁行（間口）5m×桁行約7.5mの礎石建ちで、土間（通り庭）を持つ。1999年に実施したJR桃山駅前の立売町の調査では、6棟の礎石建物¹¹⁾を検出している。ここでの建物規模は、梁行が4～6m、桁行は7.5～12mであり、ほとんどの建物が通り庭を持つ。これからすると、今回検出した建物の規模・構造は、伏見城城下町では標準的なものと考えられる。また、SB2の裏側には、石組みの水溜SE466があり、さらに建物から離れて瓦器の甕を据えた便所SX472がある。水溜は、当地の地形と地質から井戸の設置が困難なため、日常の雑用水を溜めて置くためのものである。SE297など18世紀の水溜もあることから、この場所での基本的な生活設備と思われる。

町割・宅地の規模

宅地の規模は、試掘調査の3トレンチB区で検出した段差と道路までの距離、1・2・8トレンチ東側の崖面と道路までの距離がそれぞれ概ね30mであることから、15間で設定されたものであることが窺える。試掘調査の3トレンチB区で検出した宅地境界と考えられる段差は1mもあ

る。「一間道」西側の宅地は地形が西下がりであることから、この段差の裾部には、本来、滞水を避けるための排水路などの施設が存在したと思われる。建物規模が判明するのは間口5mのSB2の1棟だけであったが、その他の遺構、カマドや点在する礎石のあり方から道路の両側に建物が存在したことがわかる。これらのことから、ここでは間口が狭く奥行が深い短冊形の地割りが行われたと考えられる。ただ、試掘調査の7トレンチの「一間道」を挟んだ東側では、道から崖面まで30mの距離がなく、試掘調査の6トレンチの位置は東西方向の谷筋にあっており、近年までこの谷筋には水路が存在しており、このような場所に宅地の地割り施工が行われたとは考え難い。したがって、この地区内の「一間道」に面しているすべての場所で均質な地割りは実施されていないようである。試掘調査の10トレンチA区で検出した、墨染通から東西方向の崖面までの距離は30mを測る。崖面は、地山を急角度(42°、比高差5.5m)で2段に削っていることから、人工的に削りだされたものであり、裾部の川は、谷筋に流れる水を制御するために設けられたものである可能性が高い。伏見城城下町の町屋地区の街区は、基本的には道路に囲まれた部分が長方形を呈し長辺120m、短辺は60mを測る。背割線によって2分割され二面町となり、宅地としての奥行は30m(15間)となっており、京都の天正地割りに通じるものである¹²⁾。伏見城では、宅地の奥行規模がわかる調査例は少ないが、先に触れたようにJR桃山駅前の立売町では、道路から30mの地点で武家屋敷との背割になる石垣(抜き取り跡)を確認している。これらのことから、伏見城城下町の町屋地区の奥行基本サイズは30m(15間)であり、今回の調査区のような城下町の周縁部でも同じ規格によって町割が行われたことが判明した。ただし、現行の町境は「一間道」を挟んで万帖敷町と六躰町とに分かれており、両側町を形成していない。このことは調査地周辺の大津街道、宇治街道の町境も同様である。これらの町境が、いつの時期まで遡るのか検討する必要があるが、城下町中心部との差異として認めて良いように思われる¹³⁾。

江戸時代後半の様相

18世紀後半になって再び調査地は宅地として利用される。この時期も宅地は、道路の両側に展開したようであるが、遺存状態が良好であったのは道路の西側であった。宅地はSD90・91・116・125・145・136などの溝によって区画され、その規模は道路からの奥行17mと狭くなっている。宅地の裏側には、傾斜のある地形の排水を促すためにSD128が設けられている。SD88は、宅地区画溝よりも新しく、そこに含まれる遺物はコンニャク印判の伊万里が含まれることから18世紀後半から19世紀初頭には、宅地としての利用は無くなっている。

試掘調査の10トレンチB・C区は17世紀の遺構はないが、18世紀代後半の遺構・遺物が出土している。この中にはB区SK2から出土した土師器椀に「隆寺栄」の墨書があり、周辺に寺院が存在したことが想定できる。宝暦7年(1757)の『伏見古地図』(伏見桃山城蔵)には「一間道」東側に寺院は「隆関寺」・「大昌寺」・「正圓寺」の3寺が、神社は「新明社」・「天神社」の2社が描かれている。絵図であるため、厳密にどの場所にあるかは明らかではない。ただ、この中の「神明社」は、現在も「桜町大神宮」として万帖敷町に残っており、これらの寺社は今回の区画整理対象地の東側、住宅地となっている万帖敷町内に点在したとも推測できる。出土した墨書

土器はこれらの寺院に関連する可能性がある。¹⁴⁾

註

- 1) 内藤 昌・内藤耕嗣・高橋宏之「伏見城() - 武家地の建築」『日本建築学会論文報告集』第181号 1971年
- 2) 新井千晴・磯永和貴「伏見城下町の原初プランと大津街道」『歴史地理学と地積図』 1999年
ここでは大津街道のルートとその変遷が指摘されている。
- 3) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』 2001年
- 4) 柴 暁彦「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 5) 岩松 保「伏見城跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- 6) 久世康博「伏見城跡 (FD32)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
- 7) 小松武彦「伏見城跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 8) 梶川敏夫「伏見城跡 69」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成7年度 京都市文化市民局 1996年
- 9) 森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』 2001年
- 10) 城下町の道路は、それぞれのランクによって道幅が決定されており、幅一間は最も狭いようである。
矢守一彦『都市プランの研究』 1970年
- 11) 桜井みどり・南 孝雄「伏見城跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 12) 喜田貞吉「京間、田舎間を論じて令尺と曲尺との関係に及ぶ」『歴史地理』21巻6号 1913年
また、森島康雄氏によって、桃山丘陵西斜面から平地の町割りは文禄5年(1596)の大地震後に行われたものであることが考古学の成果によって明らかになっている。
森島康雄「伏見城城下町の成立過程」『国家成立期の考古学』 大阪大学考古学研究室 1999年
- 13) 大坂城は、慶長3年(1598)の三の丸造営後の豊臣後期には、町屋規模の奥行20間が確立する。江戸を始めとする江戸時代の城下町もこれと同規模であり、これらに比べると伏見の奥行15間は小さい。京都では、秀吉によって天正18年(1590)以降に町割り改正(天正地割り)が実施され、南北120m、東西60mの長方形街区になっており、宅地の奥行30mは伏見城の町屋地区と同じである。文禄4年(1595)の豊臣秀次失脚後、豊臣政権下の首都として確立する伏見の意義、大坂城三の丸造営直前における豊臣氏の城下町建設のあり方とあわせて注目される。
玉井哲夫「町割 屋敷割 町屋 - 近世都市空間成立過程に関する一考察 - 」『年報 都市史研究 2 - 城下町の類型 - 』 都市史研究会 1994年
横田冬彦「豊臣政権と首都」『豊臣秀吉と京都 聚楽第 御土居と伏見城』2001年12月10日)
- 14) 瀬田勝哉「伏見古図」の呪縛」『武蔵大学人文学会雑誌』31-3 2000年
伏見の絵図類については瀬田勝哉、山田邦和の両氏より様々なご教示を賜った、記して感謝致します。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-11							
編集者名	南 孝雄							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 ふかくさおおかめだに 深草大亀谷 ろくたいちょう・ 六躰町・ まんじょうじきちょう 万帖敷町	26100	1064	34度 56分 29秒	135度 46分 43秒	試掘調査 2001年9月 28日～2001 年11月26日 発掘調査 2002年5月 8日～2002 年7月30日	約970㎡ 約1,500㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡	城跡	江戸時代前期	路面、建物、礎石、 溝、水溜、土壇	土師器、施釉陶器、 焼締陶器、瓦器				
		江戸時代後期	路面、建物、礎石、 溝、水溜、土壇	土師器、施釉陶器、 焼締陶器、瓦器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-11

伏見城跡

発行日 2002年10月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961